

今月の本

アンデルセンのおはなし

スティーブン・コリン／英語訳
 エドワード・アーディゾーニ／選・絵
 江國香織／訳
 のら書店



14の物語が収録されているうち『雪の女王』から抜粋したのは、災いの種が世界に撒かれる冒頭部分。これから世界はどうなるのか……考えながら読んでみてはいかがでしょう。

これは、とても邪悪な一人の小妖精のお話です。

ある日、たまたま特別気分が高揚していた彼は、とんでもない力を持った鏡を作りました。その鏡に映すと、いいものはすべて消えてしまっていて映らず、そのかわりに、みにくいものや役に立たないものがすべて、実際以上にひどく悪く映るのです。どんなに姿の美しい人たちでも、ぞっとするほどみにく見えたり、胴体がなくなったり逆さまに映ったりしました。ひどくゆがめられてしまうので、顔の区別なんかつきません。たとえはたった一つのそばかすが、鼻にも口にも、そこらじゅうに広がってしまうのですから。邪悪な小妖精は、これはものすごく愉快だと思いました。人間の心に何かやさしい気持ちや浮かんで、鏡に映るのはそういうみにくいしかめつらばかりなのです。自分の賢い発明品に、笑いが止まりませんでした。小妖精たちの学校（彼はその創設者でした）の生徒たちは、奇跡が起こったと言いました。なぜって、彼らにしてみれば、この世ではじめて、人間たちのほんとうの姿を見られるのですから。みんな、この鏡を持ってあらゆるところに行きましたので、しまいには、鏡にゆがんで映ったことのない人間が一人もいなくなりました。そこで、今度は天国に行って天使たちをからかってやろうと、みんな空高く飛んでいきました。

高く飛べば飛ぶほど、鏡のにやにや笑いは邪悪になっていきます。そして、あまりにも激しく笑ったり、ひどいしかめつらをしてたりしたために、じきに鏡はふるえだし、ついに地面に落下して、何十億ものかけらになって飛びちりました。

もちろん、これで状況はずっと悪くなりました。かけらのなかには砂つぶほどしかない小さなものもあり、そういうものが人の目のなかに入ってそこにとどまれば、その人の見るものはみんなゆがんで、物事の悪い面しか見えなくなってしまうからです。かけらのなかには人の心臓にまで入りこみ、おそろしい事態を引き起こすものもありました——そうになると、心臓は氷のかたまりになってしまふのです。かけらのなかには窓ガラスに使えるほど大きいものもありましたが、その窓ガラスを通して見る室内にいる友人の姿は、疑ってかからなくてはなりません。めがねになるかけらたちもありましたが、人々がそういうめがねをかけて、世のなかをはっきり正しく見ようとしても、まったくひどいことになるのです。あの邪悪な小妖精は、これをとてもおもしろがり、おなかの皮がよじれるほど大笑いしました。いまでもまだ、そのかけらたちはたくさん空中を漂っています。では、それからどうなったか、先を聞くことにしましょう。